

## 初めての全国労働者大会は 民主労総との合コン

ミン・ヘリ（公共運輸労組ソウル大病院分会）

私は一寸したことでも感動し、幸せを感じるタイプの人間です。そのような性格のためになのか？ 病院に就職するまで、人生で失敗したことはないと考えていました。友人たちは病院に就職した後、出勤する途中で交通事故が起きれば良いなど、それで出勤できないようなことが起これば良いなど、私に話しました。でも、私は出勤するのは楽しかったのです。患者さんが元気になって退院する姿を見る、それだけが好きです。職場に行くことそのものが好きだった私が、全国労働者大会に行きました。もちろん、職場に面白くないことがあったから全国労働者大会に参加したという意味ではありません。

全国労働者大会に行ったのは、今、もう一度考えても、不思議で大切な経験でした。そしてこの感想を言おうとすると、私が労働組合と出会ったその当時に戻らなければなりません。2015年の秋、ソウル大病院は政府の政策を云々して、就業規則の改悪案を職員に押し付け始めました。看護師の間で噂が広まりました。職員を講堂に集めて署名をさせ、後になって分かった職員が署名を取り消したいと言っても無視して、徹夜勤務を終えても改悪案に署名しなければ家に帰らさないといった、強迫性たっぷりの言葉も管理者たちは躊躇することはありませんでした。病院に楽しく通勤していた私にも順番はやって来ました。主任の看護師が署名用紙を持ってきて、署名しろと言いました。そのせいか、そのお陰かどうかは分かりませんが、こうして私は労働組合と出会うことになりました。入社して5年目のことでした。

労働組合に出会うまで、私は賃金とか団体協約がなんなのかも知らない、狭い井戸の中の平凡な看護師でした。そして、全国労働者大会で市庁広場をギッシリと埋めた組合員たちを見て、「あー、もっと大きな世界があるのだなー」と感じるようになりました。1時35分、ソウル市庁駅の駅舎から私の初めての全国労働者大会は始まりました。集まった人たちはプラカードと横断幕などを使って、自分たちのことを世の中に訴えていました。人々

はやがて市庁広場に向かい、色々な産別労組の組合員たちはすべて、人それぞれに全国労働者大会を楽しんでいました。慣れている組合員たちの中で、私はまるで民主労総と合コンをやっているようでした。言い訳をするようですが、よく分からないだけに、ときめいて新鮮でした。そのごちなさを隠そうと努力しながら、私が所属する医療連帯の隊列に加わって席を取りました。

舞台では多くの人たちが登ったり降りたりしていました。率直に言って私は、私が民主労総の組合員であるということを知ってからそれほど経っていないので、選挙に立候補した多くの候補者を紹介する時間は退屈に感じました。直選制に変わってから2回目の選挙だということでした。目をつむって『全国労働者大会』を思い起こすと、パッと二つの場面が浮かびますが、それは旗の入場の場面と唄う文化先鋒隊の同志たちです。本大会が始まってから余り経たない時間に、産別労組の旗が入場する時間になりました。司会者が記者たちに「一回だけのフォト・タイム」だと言い、記者たちは写真を撮るために舞台の上、或いは建物の屋上に席を取りました。それから本当に圧倒的な場面が演出されました。広場にびっしりと座っている組合員の間を、洪水が分けるように旗が分け入ってきました。今まで、どこでも見たことがなかった光景で、それほど印象深いものでした。また唄う文化先鋒隊の同志たちは、手首に赤い鉢巻きを結んで、節度ある振り付けとハーモニーが素敵な歌で、私に戦慄を走らせました。宣伝行動や集会をしたときに時々聞いたことのある『ハンマーと刀』という歌が、唄う文化先鋒隊が唄うとどうして素敵で浮き浮きするのか、いつの間にか私も、舞台の後方の大画面に映し出される歌詞を見ながら、浮き浮きと一緒に唄っていました。

私は全国労働者大会でアルバ労組があるということを知ることになりました。アルバイトをする人たちは普通は学生が多く、入社5年目で組合員になった私には、再度振り返ってみる瞬間にもなりました。そして全国労働者大会が行われる以前から、高い塔や屋上で高空籠城も闘ってきたとも言いました。大会が終わって新聞で見ましたが、写真を見ただけで目眩めまいがしました。このように多くの人たちが労働者の権利に対して行動し、訴え、勇気を出して先頭に立っている。今回の大会を通して『労働者のために散華された烈士』程度に理解していた全泰壺烈士についても、もっと関心を持ち、あれこれと探してみたりもしました。司会者が話したように47年前に散華した全泰壺烈士の叫びと、今の時代の労

働者の要求は大きく変わっていません。「労／働／解／放」という看板は、そのように各自のそれぞれの思いを載せて燃え上がりました。

私が全国労働者大会に参加することになった過程は永く、また多くの時間が掛かりました。労働者の価値と尊厳性に対する我が国の教育課程が不足しているせいもあると感じるのは事実です。しかし、不当労働行為が蔓延する看護師の世界でも、私は結局、全国労働者大会を避けていました。そして私が全国労働者大会に参加したことに、私よりも先に全国労働者大会と出会った全国の多くの労働者の先輩たちが、喜んでくれていました。このように、ゆっくりではあっても労働に対する認識の変化は続けられており、自ら労働者の権利に対する話しをする人たちは徐々に増えていっています。そして私も、いつからか、多くの看護師の組合員と手に手を取って、全国労働者大会参加することを大胆に夢に見ています。

ちょっと考えてみれば、『労働者の人権、労働者の権利』を話すことは当然であるのにも拘わらず、我が国の一部では大げさな態度だといった雰囲気を作られています。行進をしながら、市民たちは応援の声をかけてくれ、それぞれの要求を書いたプラカードを掲げている産別労組の組合員に支持を送りながら、心の底からジーンとくる連帯の意識を感じました。私は労働組合と出会った以後は、労働者が自分たちの話をしようとする時に感じる不快感が、消えるようになる日がきつとくるだろうという希望の火種を、心の中の一角に置いておこうと努力しました。行進をしながら、多分私の小さな希望の火種が、信じることで一步を踏み出すことになるにちがいないと考えています。今回の全国労働者大会を通じて、政府も労働者の「労組する権利」について、一緒に話をしてくれれば良いと思いました。そして、非正規職の正規職化政策によって、なんとか傷を負うような人が生まれないことを、切に願っています。